

仕事はとても単調だった。井ノ口マナはパソコンに登録された社員情報をひたすら書面に書き込んでいく。その記入が一段落すると机の左側に積んである書類の束を手前に寄せる。次はこれを給与システムに入力しないといけない。刺激のない退屈な仕事。時計を見ると午後三時だった。マナは両腕を上げて体を伸ばした。

「マナちゃん、コーヒー飲まない？」

同じ総務部の先輩、鶴田アイリが声をかける。

「飲みます」

マナは待ちかまえていたかのように即答すると、書類の束の上にバインダーを置いて立ち上がった。

マナは社員百名ほどの設計事務所に勤めている。薄灰色の天井の下、事務机がただたと並ぶ味気ない執務スペースで設計部員たちはパソコンに向かったり電話で話したりと忙しそうだ。その中をマナとアイリは連れ立って歩く。濃いピンクの長袖ニットと黒地に紫色の花柄の膝上タイトスカートを着たマナとビリジアンブラウスにキャメルのススペンダー付きワイドパンツを着たアイリは無機質なフロアの中でよくも悪くも目立つ。

カフェスペースに向かう二人を見て、すぐに席を立ってついてくる者もいれば、それを冷ややかに見送る者もいる。果たして、執務スペースの端にあるカフェスペースは女性二人を囲む賑やかなサロンになるのが常だった。先に来ていた設計部員が二人にコーヒーを注いでくれる。

「もう煮詰まってアイデアでないから、気分転換に今夜飲みに行かない？」

入札案件の設計を担当している矢口ケイスケがマナとアイリを誘う。

「いいよ」「私も大丈夫です」

女性二人の参加の返事を聞いて、周りの男性社員の目の色が変わる。

「俺も行こうかな」「俺も」

「ちよっとちよっと、アンタたち」

アイリが保護者ぶって男性社員に言う。

「この間みたいにマナちゃんに悪いこと教えないでよ。まだ、二十歳の生娘なんだから」

矢口が「姐さんに叱られたー」と派手に騒ぐ。マナはつけまつげに縁どられた目を上目遣いにして「この前、仕事の目立たないサボり方教えてくれたの、アイリさんですよ」と笑顔で混ぜ返す。その場はどっと盛り上がった。

マナはカフェスペースから執務スペースに目をやる。観葉植物に遮られているとはいえ、机に向かっている設計部員の姿は隙間からうかがい知れる。向こう側の何人かと目が合った。彼らは迷惑そうな顔をしているが文句を言うわけでも注意をするわけでもなかった。さりげなく視線をはずし、また机に向かう。あの人たちはこつちに來たくないのかな、楽しいのに、とマナは不思議に思う。

「マナちゃん、お願い」

隣にいる佐野ソウタが小さな声でマナに話しかけてきた。マナと佐野は今年の新入社員で同期同士だ。だが、マナは短大卒の二十歳、佐野は四大卒の二十二歳と年齢はマナの方が下だった。

「斉藤さんも誘って」

「えー、嫌だよ。私、あの子とほとんどしゃべらないもん。設計部員同士だからあなたの方が接点あるじゃん。自分で誘いなよ」

入社してから七か月経つが、マナはアイリ以外の女性とはあまり親しくなかった。男性社員とのほうが気軽に話ができた。

「真面目そうで話しかけにくい。ちよっと苦

手」

「でも、そんなところが俺の好み、ドストライク」

「助けてえ。ここにヘンタイがいます」
マナの呼びかけに周りの設計部員たちが笑ってはやしたてる。

「そろそろ仕事しろよ」

上司が通りすがりに声をかける。それを合図にカフェスペースにいた人たちは使ったインサートカップをゴミ箱に捨てるどろどろと席に戻っていく。

マナはため息をつきながら、名残惜し気にその場を離れる。アイリがマナの横に並んだ。

「給与データの入力終わった？」

「これからです。入力終わったら読み合わせ
お願いできますか」

「もちろん。さっさと仕事片づけて飲み会に行こう」

マナは表情を曇らせ、覚束ない返事をする。
アイリはすぐに気がついた。

「今日は年末調整の差額処理が入るんだっけ」

「はい、まだ全然手をつけてなくて」

マナは情けなさそうな声を出す。

「分かった。私も入力手伝うから。残業しないように頑張ろう」

「ありがとうございます。助かります」

アイリのおかげで終業時刻の五時を少し過ぎたところで、今日やるべき仕事を終わらせることができた。アイリが入力し終えた給与データを持って上司の確認を取っているあいだ、マナは疲れ切って机に突っ伏していた。そこへ設計部の部長がやってきてマナに声をかけ、紙を差し出す。

「この書類、今日までだったよね。出すの忘れてた」

マナはぼんやり書類を受け取ると、部長は「よろしく」と言って去って行く。手元の書類を見ると手当支給の申請紙だった。今月の分はもう締めちゃったし、来月でいいや、

と思いながら、書類をバインダーに挟み机の引き出しに入れる。

「マナちゃん、帰りの準備できた？」

上司の所から戻ってきたアイリが話しかける。マナは急いで机の上に重なった書類をまとめて引き出しに仕舞いこむ。

「アイリさん、お手洗いに寄ってもいいですか」

「いいよー。私も行く」

二人は連れ立って執務スペースから退出して、エレベーターホール脇のトイレに向かう。不意にエレベーターの扉が開いて、中から外出帰りの水戸マモルが出てきた。

「お疲れ様です」

水戸は穏やかな表情で頭を下げる。

「水戸君、これから皆で飲みに行くんだけど行かない？」

マナは人懐こく誘った。水戸はスッと腕時計を見る。

「これから現場で言われたことを打ち合わせしないといけないから。ありがとう」

水戸は丁寧に断ると執務スペースの扉を開け入っていった。

「水戸君ってマナちゃんや佐野と同期なんですよ。なんか落ち着いてるね」

トイレの鏡に向かって口紅を塗りながらアイリが言った。

「ですよね。私から見れば二歳上なんですよ。そんなもんかなと思うんですけど、佐野と同じ年とは思えない。まあ、佐野が幼稚なだけかも」

「いやいや、アラサーの私から見ても老成してると思うもん。きつと彼女が年上なんだよ」

アイリの言葉にマナはマスカラを塗る手を止めた。

「えー、彼女いるように見えます？」

マナは意外に感じた。水戸からは恋愛に結び付く熱気や高揚感や華やいだものが一切感じられなかった。表情やリアクションも薄く

目立たず、まるでお堂の奥に安置された仏像のようだった。

「まあね。ほら、みんなを待たせたら悪いからさつさと行くよ」

アイリに促され、我に返ったマナは急いで化粧道具をしまうと彼女のあとを追った。

会社から出ると風が冷たかった。十一月の半ばになると昼間は暖かくても夜は空気がぐつと冷える。マナは白いふわふわしたボアジヤケットの首元を掻き合わせながらも、仕事からの解放感で気分は浮き立っていた。

会社は駅前大通りに面したオフィスビルにあり、その周りは他のオフィスビルや飲食店などが入った雑居ビルが立ち並んでいる。歩いて五分ほどの居酒屋に入ると、男性設計部員たちはすでに集まっていた。

「アンタ達どんだけ飲みに力いれてんのよ」
アイリが軽口をたたく。男性たちはその言葉をスルーして二人を席に座らせる。

「ま、ま、とりあえずビールで」とグラスに瓶ビールを注がれ乾杯をした。

「来るときに水戸君に会って誘ったけど、仕事が残ってるから断られた」

マナの言葉に設計部員たちは軽くうなずく。

「第一課はいつでも忙しいよなあ」

「課長がデキる人だから、注文もダメ出しも多いんだよね。部下が大変だろ」

先輩たちが盛り上がっている脇で、隣に座っている佐野がマナに言う。

「この間、水戸が女の人と歩いているの見たよ」

「ふうん、彼女いるんだ。意外」

マナは先ほどのアイリの言葉を思い出した。

「やっぱ、年上？」

決めつけの質問に佐野は少し面食らったように質問を返してきた。

「何？ あいつ、そういう好みがあんの？ そ

んな面白そうな話、俺も混ぜてよ」

「水戸君の好みなんか知らないわよ。あの人もいつも落ち着いた感じじゃん。私のようなバカな女を寄せつけなさそうじゃない？」

「マナちゃんはバカな女じゃないよ」

開口一番に佐野は否定をする。

「でも、マナちゃんの言ってること分かる。

達観してる感じ。俺のことなんてお子様だと思ってるんだろうな」

マナはうなずきかけたが、途中でやめた。そんな様子に気づかず、佐野は話を続ける。

「で、この間、女の人と歩いているのを見て。結構な年上だったけど、美人でスタイルが良くて、あれならアリだわ」

「アイリさんみたいな感じ？」

「いや、全然違う。三十代に見えたけど、なんか透明感があった。アイリさんはちよつとヤサグレ感あるだろ」

アイリは二十九歳だったが、明るい茶髪のロングヘアと濃いアイメイクのせいで若作りしている感じがあった。

「アイリさん、佐野が悪口言ってるぞ」

今まで他の話題に参加していた向かいの矢口がピンポイントに聞きつけて、その場を混ぜっ返す。

「ヤサグレ感があるって」

「佐野、覚えとけよ」

アイリのハスキーな声が向こう端から飛んでくる。

「ヤサグレ感あるー」「アイリさん、ほめ言葉ですよ」

佐野やほかの設計部員たちがやんやと飛ばし合う喧噪のなかで、マナは笑いながらふと思いつかべる。落ち着いた雰囲気の中で静かに会話を交わす水戸と女の姿。女の容姿はぼやけていてまったく像を結ばなかった。

マナは書類を胸に抱えたままホワイトボードを見つめていた。水戸は外出中のようだった。帰社時間が十六時半と書かれている。

水戸は一日の大半を事務所外で過ごしている。優秀な先輩達が彼を施工現場や客先へと引き連れ回しているようだ。会社として久しぶりに受注した大手個人病院の設計監理は第一課の功績だった。新入社員ながらもそこに配属された彼は優秀なんだろうなど、マナはぼんやり思う。

「マナちゃん、どうしたの？」

パソコンに向かって見積書を作成していた矢口が手を止め声をかける。

「水戸君、外出中なんです。また来ます」

マナは自席に踵を返す。

「あ、マナちゃん、待って。ちょっとこっち」
矢口はそう言って立ち上がると、カフェスペースへ向かう。マナはちょこちょここと着いて行く。矢口はオフィスグリコに百円を入れると「好きなを選んで」とマナにお菓子を勧めた。

「ありがとうございます」

マナは嬉しそうに引き出しを開け、チョコレートクッキーの袋を取った。

「マナちゃん、今度二人でご飯食べに行かない？」

矢口の急な提案にマナは驚いて彼の顔を見上げた。

「おいしいおでん屋さんがあるんだ。屋台みたいになって、これから寒くなる時期にぴったりな感じ」

「……はい」

「そんな深い意味はないよ。ちょっとマナちゃんとしやべってみたいなと思って」

「はい」

「また今度連絡するね」

そう言って矢口は立ち去っていく。マナはその姿を見送ると足早に自席に戻った。パソコンに向かうとすぐさまスカイプでアイリにメッセージを送る。

『どうしよう。矢口さんにご飯誘われた』

『マジ？ いっ？』

マナが顔をあげると斜め向かいに座ってい

るアイリと視線があった。

『さっきカフェスペースで。今度二人でおでん食べに行こうって』

『うわっ、矢口の方で生意気な。今日の帰りにお茶行こう。そこで詳しく』

『お願いします！』

マナはスカイプの画面を隠すと仕事に取りかかる。マナは自分が嬉しいのか困っているのか分からなかった。ただ、興奮していて、その高揚感が彼女を楽しい気持ちにさせていた。

パソコンに向かって書類の入力を行っているが、マナの気はそぞろだった。打ち間違いが多くなかなか処理が進まない。

「井ノ口さん」

後ろから名前を呼ばれ振り返ると、水戸が立っていた。

「何？」

不意の出現にマナは驚いて愛想のない声が出てしまう。

「さっき俺の席に来てたって聞いたから。何か用があるのかなと思って」

マナの不愛想な返答にも表情を変えず、水戸は穏やかな声で尋ねた。彼の表情に喜怒哀楽は見られない。本当に仏像みたいな人だなとマナは思った。

「あ、わざわざありがとう。この支出書に印鑑が抜けているから押ししてもらおうと思っ
て」

マナは脇に置いてあったバインダーを取り出して水戸に渡す。水戸は「了解」と受け取ると自席に戻りかけた。マナはすかさず立ち上がってついて行こうとすると、水戸に止められた。

「いいよ、俺また持ってくるから。井ノ口さんは仕事続けて」

なんか大人だなあとマナは思い、素直に席に着いた。

古木とレンガを使ったアメリカンビンテー

ジ風のお店から外に出る。時刻は午後七時を過ぎ日はすっかり落ちていたが、街の明かりが夜の闇を侵食し駅前大通りはぼんやりと白んで見える。マナは店の前でアイリと別れた。

「なんか進展あったら教えてね」

アイリは笑いながら手を振ると、足早に駅へと向かって歩いていく。マナは反対方向に歩き始めた。会社から歩いて十五分ほどのところにマナが住むマンションがある。短大を卒業後、郊外の実家を出て一人暮らしを始めたばかりだ。

会社帰りにアイリとパンケーキを食べながら、矢口との一部始終を話したが、最終的には社内の噂話で終わった。アイリが「矢口はお調子者だけど悪い奴じゃないから、ご飯ぐらい行って来たら」と言っていたのを思い出し、マナもそんなもんなあと思った。

短大の頃に付き合っていた男とは入社してしばらく経ったところに別れた。お互い環境が変わって興味の対象が別のものになった時期だったので、別れはあっさりしたものだった。

会社の同僚や先輩と遊ぶのは楽しかったが、そろそろ誰かと付き合ってもいいかもしれない。それが矢口でいいのか分からないが。

マナはぼんやりと考えながら道を曲がる。前方を見て思わず足を止めた。曲がった先の居酒屋の入り口の前に水戸がいた。その隣に女性が立っている。

彼女はベージュのトレンチコートを上品に着こなし、ロエベのモスグリーンのバッグを腕にかけていた。ピンと伸びた背筋と首元で切り揃えられたまっすぐな黒髪が美しく知的な女性を醸し出していた。ショーウインドウを指さしながら水戸に何か話しかけている。水戸は彼女に笑顔で答えながら肩に手を添えて店の中に入っていった。

マナは一步も動けずにその様子を見ていた。離れたところから見ても年上かどうか分からない。興味本位で足早に居酒屋の前に来

て、ガラス戸から店内の様子をうかがった。

手前右側の席に水戸が背を向けて座っている。女性はこちらを向いてコートを脱いでいるところだった。三十代半ばかな。きれいな人。マナはそう思いながらじつと彼女を見ていた。一瞬彼女がこちらを向き目があつた。マナは顔を背けたが、彼女は何事もなかったかのようにメニューを取り寄せてのぞき込み始めた。

マナはふうんというため息とも不満とも聞こえるような声を出すと、明るい店先を通り越して暗い路地を進んでいく。

大通りの喧噪が遠ざかり、辺りは古い長屋と新しい一軒家が入り混じった住宅街になる。そのせせこましい住宅街の一角に四階建てのマンションが建っている。マナはその共有玄関に入ると郵便受けをのぞく。そして、コンクリートの階段をカツカツと靴音をたてて昇ると、三階の自分の部屋へ入り鍵をかけた。

なんとなくお腹がすいた。マナはローテーブルに置いていた携帯電話の画面から自分の爪に目を移す。マニキュアはちゃんと乾いているようだ。濃い紫色にワンポイントのパールが光る指先は大人可愛く見えてしばらく自己満足に浸る。

指先を携帯画面に伸ばし動画を止めて時刻を見る。午後十時半。会社帰りに食べたパンケーキではお腹がもたなかったようだ。こんな時間に食べたなら太るかなと思いつつ、ビーズクッションから立ち上がる。冷蔵庫の中を見たがヨーグルトとハムと水しか入っていない。マナは黒いマキシ丈のワンピースの上に白いボアジャケットを羽織ると財布と携帯電話を持って外に出た。

一番近いコンビニは路地から大通りに出て向かい側へ渡ったところにある。角の居酒屋の前を通った時に中を見たが、水戸と彼女の姿はなかった。

コンビニの中は繁華街から駅へ向かう人や帰宅する人で混んでいた。マナは中華まんとかフェオレを買い、イトインスペースで座って食べた。イトインスペースはガラス壁に面していて、ガラス越しに外の大通りを歩く人が見える。何気なく外を見ていたマナは黒髪のボブカットの女性を見てハツとして立ち上がった。

ガラス壁の向こう側に水戸と彼女の姿が見えた。コンビニの前で彼らは立ち止まり何か話している。彼女の口元は笑っているのに反して、二重の大きな目は憂いを含んでいるように見える。そのせいか彼女は急に年老いたように見えた。

彼女はマモルに手を振ると駅の方へ歩いて行く。水戸は元来た道に戻るのかと思いきやコンビニに入ってきた。マナは黙って彼の姿を視線で追う。レジを終えた水戸がイトインスペースの脇を通った時に声をかけた。

「水戸君」

こちらに顔を向けた水戸は特に驚いた様子もなくマナの方に歩いてきた。

「井ノ口さん、こんなところで会うなんて。どうしたの？」

「私んち、この近所なの」

マナは空いている隣の椅子の座面をポンポンと叩いて座るように促した。

「俺は大通りをまっすぐに進んで、もう一つあるコンビニの近くに住んでんだ。ご近所さんだったんだ」

マモルは一つ席をあけた隣の椅子に座り、ビニール袋から炭酸水のペットボトルを取り出した。

「彼女とデートだったの？」

マナは単刀直入に聞き、彼はペットボトルの蓋を回す手を止めた。

「さつき、彼女さんといるところ見ちゃった」
彼は少し困った顔をした。彼が表情をあらわにするのは珍しいとマナは思った。

「向かいの居酒屋に入るとこ見たんだ。ちょ

っと年上なのかな。でも、きれいな人だねー」

「井ノ口さん」

水戸が少し強い口調で話を遮った。目が真剣だった。マナは驚いてすぐ謝った。

「ごめん。聞いちゃダメだった？」

彼は慌てて「こっちこそ、ごめん」と謝った。いつもの穏やかな表情に戻っている。

「俺が彼女といたこと、皆には黙っておいて欲しい」

静かだが力のこもった声だ。

「ふうん。訳ありなんだ？」

マナは問いかけたが水戸は答えなかった。

「はい。わかりました。誰にも言わないよ。でも、佐野も彼女と一緒にいるところを見たと言ってたよ。そっちはどうする？」

水戸はちよつと苦笑いをした。

「どこに行っても人の目ってあるんだな」

そう言っただけで炭酸水をグビグビと飲む。細い首筋に喉ぼとけが動き、男だなどマナは思った。

「佐野の方は放っておくからいい」

落ち着いた声で言うのと椅子から立ち上がる。

「井ノ口さんはいつも楽しそうだね」

マナは彼を見上げる。彼は穏やかな笑みを浮かべていた。

「だって、楽しくないとつまないじゃん」

「そう？」

マナの答えに水戸は問うような否定するような相槌をうつと「じゃ」と手をあげてコンビニから出て行った。マナは手を振って見送りながら彼の相槌のニュアンスに浸っていた。

次の日からマナは水戸のことを気にしてに見ていた。彼はいつもどおり穏やかな態度で皆と接している。秘密を握っているマナに対しても思わせぶりの態度はなく、それがマナにとって意外だった。こういう時は内緒めいて話しかけたり目配せしたりするのが普通じ

やないのだろうか。マナがそう思いながら複写機でPDFを取っていると、矢口がすっと寄ってきて「おでんのこと考えといて」と小声で言っ立ち去っていく。普通こうだよねえ。マナは笑顔で見送りながらなんだか納得がいかなかった。

終業時刻の午後五時を過ぎ、マナはため息をつきながらパソコンの電源を落とす。机の上には作成できなかった書類が積まれている。それらを整理するとバインダーに挟み机の引き出しにしまう。

「マナちゃん、ちょっといい」

アイリがこちらに向かってきた。マナは帰り支度の手を止めて彼女を見る。アイリの表情は険しく、マナは不穏な空気を感じ、身を縮めて彼女の言葉を待った。

「杉坂部長の結婚手当の書類って手元に持ってる？」

マナは机の引き出しを開ける。書類を挟んだバインダーを一つずつ机に積んでいく。手当申請書を挟んだバインダーを見つけるとアイリに差し出した。彼女は指サックをはめた人差し指でバサバサとめくり、目当ての書類を抜き取った。

「これ、部長が今月の給与に間に合うように直接マナちゃんに渡したそうだけど、入力しなかったの？」

マナは記憶を探る。そういえば給与データ入力締め日に部長が何か持ってきていた。

「締め日の帰るときに渡されたので、来月に回してしまいました。すみません」

「帰るときかあ。部長も提出が遅いなあ」

アイリは頭ごなしに叱らなかつた。小声で部長を非難した後、マナに諭した。

「今度からそういう場合、受け取った時点で今月分は締めたので来月の給与計上でいいか聞いてね」

「これ、今月分に入れなきゃいけなかつたんですか」

マナは書類を見ながら言う。二万円の手当

を十一月分から支給するよう記入された申請書。今月二十五日支給の十一月給与には間に合わないが、来月の十二月給与時に四万円支給すれば問題なかつたし、今までもそうしてきている。

「絶対って訳じゃないけど、部長が期待してたみたいだから。私から部長に説明しておく。マナちゃんはもう帰っていいよ。ありがとう。引き留めてごめんね」

アイリは踵を返す。マナは頭を下げるとトロトロと書類を机の引き出しの中へ片づける。カバンを持って退出するとき、通路で頭を下げているアイリの姿が見えた。マナは自分の身を隠すように急いでエレベーターホールへ出る。

ビルの外に出て雑踏に紛れるとやっと心地がついた。夕闇が広がる空の下、会社帰りの人達やご飯を食べに行く人達に混ざって歩く。いつもなら楽しい気分になれるのに、マナの心の中に吐き出したい言葉がくすぶっていて気が晴れない。信号待ちの集団の中に見覚えのある背中を見つけ、マナは駆け寄る。マナの声に振り向いたのは水戸だった。

「だって、遅れて出したのが悪いんじゃない。部長だからって特別対応するのおかしくない？」

コンビニのイトインスペースで、マナは先ほど起こった顛末を一気に話した。それでも水戸は穏やかに炭酸水を飲んでる。マナが一息ついたところで「まあまあ」とカフェオレを飲むよう勧めた。

誰かに話を聞いてほしかったマナが水戸を先日と同じコンビニへ強引に誘ったのだ。さつきまで隣の席にいた男性はマナの興奮した声に辟易して早々に席を立っていった。イトインスペースには二人だけだった。

「井ノ口さんの言い分も分かる。でも、部長は振り込まれないことに腹を立ててるんじゃないと思う」

水戸は落ち着いた声でマナをいなす。マナはカップを口に当てながら水戸を見た。

「杉坂部長は結婚できて嬉しかったんだよ、きつと。だから、その嬉しさに水を差された気になって腹を立てたんじゃないかな。明日、直接謝ってみたら。たぶんもう怒ってないと思う」

仏像じゃなく仏様みたいだった。この人、仕事でもなんでも冷静に判断して対応しているのかな、すごいなあとマナは少し感心する。そして、わめきたてるばかりの自分を恥ずかしく思った。

「……そうしてみる」

カップの飲み口を見つめながら小さい声で答える。

「井ノ口さんは思っていることを何でも言えていいね」

水戸の言葉にマナは顔を上げる。彼は笑っていた。なんか不思議な感じがした。

「水戸君は言えないの？ そっかあ、不倫だもんね」

マナの言葉に水戸の顔が一瞬こわばるが、すぐに苦笑に変わった。

「そういうところ、感心する」

「で、不倫なの？ なんか言えない訳があるんでしょ」

水戸は何も答えなかった。マナは黙って水戸の顔を見ていたが、彼の唇は閉じたままだった。マナも次につながる言葉が出てこず、しばらく沈黙が続く。お互い飲み物に口をつけ、ガラスに透けて見える人の流れを見ていた。

ピロンと電子音がなる。マナも水戸もそれぞれ上着のポケットから携帯電話を出す。着信音はマナの携帯電話からだった。「矢口さんからだ」と言って、SNSを開けてメッセージを読む。明日の会社帰りにおでんに行こうとの誘いだった。即座に了解のスタンプを返信する。

「矢口さんからのお誘いで、明日おでん食べ

に行くんだ」

問いもしないのにマナの口からサラリと出た言葉に、水戸は自分の携帯電話をポケットにしまいながら少し驚く。

「それ、他人に言って平気？」

「え、別に秘密にしておくことじゃないし」

「オーブンだね。付き合うの？」

「うーん、分かんない。なんか良かったら付き合うかも。どっちでもいいや」

「どっちでもいいって……」

水戸が苦笑いして、言葉が続ける。

「女の人って感覚的だよな」

そう言った彼の目はマナではなく遠いところを見ている。

「彼女さんもそうなんだ」

マナの食らいつく発言に水戸は「そうかな？」と独り言のようにつぶやく。

「何を考えているのか分からない……女の人って」

一般論みたいに言うテーブルの上のゴミをビニール袋に仕舞いだした。

「おでん美味しいそうだなあとか、どんな服着ていこうかなとか、楽しいこと考えてるよ」

「それは井ノ口さんらしい」

水戸は穏やかな微笑を浮かべて立ち上がると、「じゃ、おでん楽しんできて」と言って去って行った。マナは座ったまま水戸を見送る。黒いライナーコートの中が寂しそうに見えるのはマナの思い込みだろうか。

閉じられたコンビニのガラス戸から見える夜は街灯と雑踏にまみれていて、彼はその中に溶け込んでいった。

「ここのおでんって、串の先に印がついてたら当たりなんだって」

そう言っ矢口はコンニャクの先をひとかじりして出てきた串の先を見た。「ないな」

マナもウズラ玉子の串を一口かじる。出てきた串の先は普通の竹串で何の印もなかった。

「えー、これ全部の串の先端だけかじって見ていきたい」

コンビニのおでん売り場みたいな電熱機器が席の前に置かれていて、好きな具を選んで食べる形式だった。マナと矢口はおでんの屋台を横して作られた席に横並びになって座っている。

「マナちゃんなら本当にやりそうでコワイ」
矢口は笑いながら言う。

「そんなことしませんよー」

マナはふくれっ面を作りながら矢口の軽く腕を押しした。そして「こんなの初めて見る」とチーズ入り餅きんちゃくを抜き取る。

「今日、杉坂部長が言ってたよ。井ノ口さんって意外とちゃんとしているって」

「意外と？」

「そう。最近の若い子は知りません、教えてもらってませんって、周りが悪いように言う子が多いのに、マナちゃんは確認不足で申し訳ありませんでしたって謝りに来たって」

マナは今日の朝一番に杉坂部長の席に行き、自分の不手際を謝ったのだった。

「何か謝るようなことしたの？」

矢口の問いにマナは昨日の帰り際の出来事を話した。

「そんなことあった後に思い直して謝りに行くなんて、すごいな。実は大人だね、マナちゃん」

マナは照れたように笑いながら、「でしよ〜」と肯定する。そう言いながら、自分ひとりの考えだったら謝りになんか行っていない、水戸のおかげなのだ、と思っていた。だが、水戸に話を聞いてもらったことは矢口には言わなかった。ふと、杉坂部長に謝った後、近くの席で外出の準備をしていた水戸がさりげなく頷いてくれたことを思い出した。

くすぐったいような嬉しい気持ちが入みあげてきて、その気を紛らわすように辺りを見回した。

「あっ」

視線が止まる。斜め向こうの席に男女が案内されていた。女性はベージュのトレンチコート脱ぎモスグリーンのカバンと一緒に荷物かごにしまっている。そうして男性と何か話しながら席に着いた。

「どうしたの？」

「あそこに座ってる人……」

声に出した矢先にしまったと思い、口を閉じた。

「ん、あその二人？」

「……知ってる人かなと思っただけど、全然違った」

「美男美女だねー、雰囲気似ているから夫婦かな」

マナたちの席と向かい合わせになっているので、女性の顔がよく見えた。大きな瞳を細めて笑うたびに黒いボブヘアが楽しそうに揺れる。間違いない。この前水戸と一緒にいた女性だ。

そこから、マナはその女性が気になって仕方がなかった。隣の男性は旦那さんなんだろうか。席が離れているので会話の内容までは聞こえない。でも、彼女の表情は水戸といったときと同じように輝いていた。何を考えているのか分からない、と言っていた水戸の顔を思い出した。

彼女が立ち上がって店の奥に向かっていく。

「ちよつとお手洗いに行ってくる」

とマナは矢口に断ると、彼女の後を追った。女性用のトイレは個室が一つだけで、使用中だった。おそらく彼女が入っているのだろう。マナは手洗い場の前に立って待つ。彼女は個室から出てくるとマナに気づき「どうぞ」と笑顔で言った。

「水戸君の彼女さん、ですよ。一緒にいるの旦那さんですか」

マナの突然で直截な問いに彼女は顔色を変えた。

「あなた、誰？」

彼女の陰のある言い方にマナは自分が大きな失敗をしたことに気づく。何も言えずに後ずさりする。

薄暗い明かりの下で見る彼女の顔には小じわがあり化粧も崩れていて、ただの中年女性だった。マナは何も言わず彼女の前から走って逃げた。

トイレから戻ったマナは気分が悪いと言って、すぐに店を出た。矢口は女性特有の体調不良だと勝手に解釈して、優しく駅まで送ってくれた。

マナは一人電車に乗りこむ。車内はあまり混んでいなかった。扉に寄りかかって外を眺める。暗い夜の景色をバックに自分の姿が映る。ゆるく巻いた髪の毛も厚く盛ったまつげも新しいフェイクフアーのコートも全然可愛くない。ただの頭の軽い女がそこにいた。

マナは目をつぶる。彼女の冷たくきつい眼差しが思い出され、それがいつしか水戸の冷たい眼差しに変わる。ぎゅっと絞られるような痛みが胸を走る。このことを水戸に知られたくない。なかったことにしてしまいたい。マナは自分のしたことをひたすら恐れるばかりだった。

次の日、マナは重たい気分のまま出社した。自分の存在を消すように黙ってパソコンに向かい続ける。

「マナちゃん、体調大丈夫？」

矢口が心配して様子を見に来てくれたが、マナはあいまいに笑って昨夜のお礼を言うとパソコンに向き直った。いつもと様子の違うマナを気にかけて、アイリも声をかける。

「マナちゃん、ちょっとコーヒー休憩しない？」

マナは伏目がちに誘いを断るとパソコンの画面に目を戻した。誰とも会いたくないし、話したくなかった。

終業時間になるとマナは逃げ出すように会

社を出た。夜の雑踏もマナの気分をホッとさせてくれなかった。何かにおびやかされるように早足で歩く。

「井ノ口さん」

背後から呼び止められた。マナは振り返りもせず、赤に変わった歩行者用信号を振り切って横断歩道へ飛び出した。

腕を引つ張られ、仰向けに転びそうになったところを受け止められた。上から水戸のぞき込んでいた。

「びっくりした。危ないなあ」

水戸はマナを立たせる。目の前の車道を自動車音が音をたてて動き出した。ヘッドライトがひっきりなしに通過していく。

「ごめんなさい」

マナは水戸の顔を見られなくて目をつぶって頭を下げる。

「ごめんなさい。ごめんなさい。全部わたしが悪いの」

水戸は何も言わなかった。もしかしたら、昨夜の事は何も知らないのかもしれない。水戸と彼女の間は何も変わっていないくて、マナが大げさに自責の念に打たれているだけなのかもしれない。

恐る恐る彼の様子を窺う。いつもと同じように穏やかなようにも見えるがやはり違っていた。目は何かを一心に見つめているようで、唇もきつく結ばれていた。

信号が青になり、人混みに流されるように前へ進む。彼は黙ったまま歩き、マナも何も言うことが出来ず横に並んで歩いた。いつものコンビニに向かっているのだろうか。マナは家まで走って逃げようかと思いつながら、水戸が何を考えているのか知りたくて黙って歩いて行く。

コンビニの前で水戸は立ち止まった。マナは彼の顔を上目で見る。サインライトが反射して顔色が悪く見える。表情も硬かった。

「鈴子さんから、会うのやめようって連絡があった」

彼の声は機械のように感情がなかった。マナは事の重大性を受けきれずに、スズコサンという響きだけを頭の中で繰り返している。

「どうして、彼女に声をかけた？」

マナの胸の中にいろいろな場面がよみがえる。居酒屋の店頭でたたずむ二人の姿、コンビニの中から見えた彼女の目に浮かぶ憂い、炭酸水を飲みながら浮かべる水戸の苦笑、さりげなく頷いてくれた彼の顔。

マナはその問いの答えに気がついたが、口に出せなかった。

「面白いネタでも手に入れようと思った？ おまえら、噂話が好きだもんな。飲み会で披露しようと思った？」

「違う、そんなじゃない」

マナは即座に叫ぶ。歩いている人たちがこちらを見たが、痴話げんかと思っただかすぐ前を向いて立ち去っていく。

「ごめん。言い過ぎた」

そう言っ、水戸はコンビニの前から立ち去っていく。彼の背中から怒りと悲しみがにじみ出ているようで声がかけれられない。マナはどうしていいかわからず、コンビニの前で立ちつくしていた。

目を覚ますと部屋の中は真っ暗だった。

あれからマナは自分の部屋に帰ると、明かりもつけず上着も脱がすベッドにうつ伏せた。どうにかしたいのに、どうしようもできない、どうしよう、どうにかしたい……と繰り返す思いめぐらすうちに眠ってしまったらしい。携帯電話を見ると夜中の一時過ぎだった。

マナは立ち上がり、レースのカーテンをめくってガラス越しに窓の外を見る。三階の部屋から見えるのは路地の街路灯と向かいの家の屋根とその向こうのマンションの壁だった。上の方を仰ぎ見ると上階のベランダと向かいの建物の隙間に薄明るい夜空が細く見えた。

どうして彼女に声をかけたのだろうか。

誰も通らぬ路地をじっと見つめながら考える。彼女が何を考えているのか知れたかった。知って、水戸に教えてあげたかった。水戸を助けたと思った。

ううん。マナは頭を振って否定する。自分はそのような優しい人じゃない。

窓ガラスに額をつける。路地を照らす蛍光灯の白い光がぼんやりとにじむ。

たぶん彼のことが好きなんだ。涙が頬を伝う。

好きだから、彼と彼女の間に入り込みたかった。自分の存在を知らしめたかった。

今ごろ彼はどうしているのだろうか。マナの心の中に水戸の穏やかな微笑が浮かぶ。そして、それがもう自分に向けられないことを思い、マナは泣いた。